一歩

社会福祉法人　アルカディア

令和　3年　9月　発行　第36号

コロナ禍と世界を読む

～コロナ禍で見えてきたもの～

コロナ禍が依然として続いている。我が国での一日の新規感染者は、２万人を超え、医療体制は今や崩壊しているといっても過言ではない。救える＜命＞が救えず、＜命の選択＞に直面しているのが実情だ。最近は減少しているが、他方では、第6波への危機感が叫ばれている。

医療においては、世界的にはトップクラスを誇っていたはずの我が国は、ワクチンは外国製に依存し、国・厚労省の旧態依然とした制度上の立ち遅れが感染拡大に歯止めがかけられない要因の一つとなっている。

医療先進国においてすら、このような実情である。世界的にみていくと、40～50万人の感染者数が常態化している。

そこで世界のコロナ状況がどのような実情になっているのか？をみていくとともに、コロナ禍、そしてコロナ後の世界と社会の在り様について考えていきたい。但し、あらかじめお断わりしておきたい。私は政治、経済、医療の専門家ではない。コロナの世界的状況について、手元に資料が積み上げられているわけでもない。せいぜいメディアから流れる情報を頼りにしながら、書き記していくしかない。少々、心もとない内容になってしまうが、これも＜市民目線＞と許していただきたい。

●世界の状況　～その1～

８月28日現在の世界の感染者数は約２億1千４百万人、死者数約447万人。（以下、数値については朝日新聞報道による）この数ヶ月の感染者数は、40～50万人であったが最近60～70万人と増加傾向で推移している。

○感染者数を国別でみると第1位～５位は、アメリカ、インド、ブラジル、フランス、ロシア。この順位は、数ヶ月間、変動していない。十位以内で特記すべきは、８位のアルゼンチン、９位のコロンビアなどの南米諸国である。

○G7を構成する先進諸国は、いずれも上位を占めており、いずれもロックダウンなどの強硬措置を発令したが、ある程度収まるとともに解除に踏み切っている。しかし、解除時、解除後感染者数が大幅に減少している訳でもない。

8月22日～8月28日までの一週間における感染者平均数をみると、アメリカの約13万人がダントツでその他の４ヵ国は約2～3万人である。決して減少しているとは言い難い。経済的打撃を最小限に喰いとどめるベクトルが働いているのだろう。

●世界の状況　～その2～

○南米諸国ではブラジルが顕著であるように、ラテン系の国民性というか「インフルエンザと同じ」という楽観的意識が強いことが要因の一つとなっているようだ。
○国家の人口数も感染者数は左右されているように思われる。平たくいえば、人口の少ない国では、感染者数は比較的抑えられている。国のあらゆる場所が三密状態にならない構造なのだ。
○このように世界的視野でみると、約130数カ国で感染者が発生している。まさに地球上のあらゆる国でコロナ禍が広まっているといえよう。

●グローバル化のもたらしたもの

○この20数年間、世界経済はグローバル化を加速させた金融資本主義、国境なき、市場経済への邁進は、結局、一部の資本家と投資家に利益が集中する結果を招いた。富める一握りの者と貧困にあえぐ者との格差は果てしなく広がった。
　一部の大資本が世界を席巻した。例えば、アマゾンは市場を独占している。中国は＜一帯一路＞政策でアフリカ、ＥＵ諸国にも進出しようとしている。＜新自由主義＞と＜独裁的国家主義＞に世界は二分された状況だ。
○部品生産の外国拠点化、半導体・部品不足の事態。日本は半導体分野で一時期、一世を風靡したが、その後、衰退の一途をたどった。ノウハウを奪い取られた挙句、新たな開発挑戦の戦いに敗れた結果だ。そして今、半導体などの生産拠点は東南アジア諸国にあり、工場閉鎖で部品調達が滞る事態に直面している。コロナ禍で、グローバル経済の根幹が揺るがされているといっても過言ではない。
○グローバル化経済は、国境を越えた市場自由競争経済へと進んだ。しかし、国家がなくなった訳ではない。そこで暮らす国民は、都市部、地方、地域で日々生活している。こうした国民生活とグローバル経済とのギャップが深まっていったのが、近年の顕著な傾向だ。
　コロナ禍が全世界的規模で拡大している背景には、このような経済分野での国境を越えた＜人流＞が、かってないほどすさまじくなっていることが大きな要因であることに疑いの余地ない。

AFPBB　News　　令和3年9月27日
世界の感染者：約2億3100万人　死者数：約474万人

●国家間格差という課題

○コロナ感染症拡大が世界的規模で起こっている中で、注目すべきは、医療体制の未整備による死者数、あるいはワクチン接種における国家間格差である。
　メディアでは報道されないため、その詳細な実情はわからない。アフリカの国々はどうなっているのだろう？一度だけアフリカの国の報道を観た。人々は「コロナより飢えの方が深刻だ。毎日、幼い子供たちが死んでいく」と叫んでいた。内戦が続くシリアでは、人口約2,600人のうち、半数に当たる1,300人が住む場所を追われ、難民キャンプで生活しているという。食糧の配分場所に群がる人たちを観ていると＜コロナどころじゃない＞光景がそこにある。ミャンマーやアフガニスタンでは…と考えていくとキリがなくなる。
○このように地球上の国々は、コロナ禍の中においても、それぞれの国情を抱えている。だからといって看過するつもりはないのだが…。
ワクチン接種においても先進諸国の接種率は、報道されるが、途上国においては皆無。先進国優先であることには疑いようがなく、途上国には、スズメの涙でしかないと推測される。これも厳然たる世界の実情なのだ。

●ニッポンファーストも一考の余地あり

〇コロナ禍で見えてきたものの一つとしてニッポンファースト的発想も考えていかなればならない課題であろう。アメリカ大統領（であった）トランプは、＜アメリカファースト＞を掲げた。
斜陽産業とそこで働く労働者層に支持をえた。更に中間層においても、アメリカとその国民が第一に優先されるべき＞としたメッセージは、実に単純かつ強烈なインパクトをもって受け入れられたのだ。グローバル化の象徴たるEUからイギリスは抜け、アメリカもTPPに非加盟だ。

政府は、
令和3年9月28日
緊急事態宣言・まん延防止等重点措置について、9月30日の期限で全て解除すると決めた。（対策の緩和は地域により段階的）

〇＜ニッポンファースト＞とは、＜命と経済＞の選択を否定すること
＜ニッポンファースト＞という視点は、ワクチン接種はじめ、医療のひっ迫状況を迅速、かつ計画的に進めること。管首相、小池都知事の＜ありきたりのメッセージには、ウンザリした。＜命と経済の両立＞と国は言うが、＜車の両輪＞という論理と同じように＜両立できないゆえ、あえて両立する＞と言っているに過ぎない。そもそも論において、命と経済＞を同列にする発想が、おかしい。全く、質の異なる両者を比較する社会の在り様が問われているのだ。多くの国民が感じていることだろう。
〇また、＜ニッポンファースト＞はコロナにとどまらない
長い間、言い続けられてきた＜中小・零細企業＞、そこで働く人たちの生活、同時に低賃金でその日の生活にも困っている人たちへのセーフティネットの構築、こうした方向性を追求するのが＜ニッポンファースト＞の発想だ。＜弱き立場にいる＞人たちが報われない社会を変えていく。この視点がコロナ禍の中で、また、いつの日かコロナが収束した後の社会の在り方として問われているのではないだろか！

国のコロナ対策に60％強が不満

〇個人の事は、個人で守るしかないのか？
　今、ひとつ見えてきたものは、＜自己防衛＞の発想である。この文を書いているさなか、管総理が総裁選不出馬を表明。事実上、退陣した。突然であり、かつ自民党内権力闘争に敗北した結果であった。国民からすれば、無責任極まりない。国が信頼に値せず、頼りないなら、国民は自らを自らの方法で守るしかない。
〇自己責任への懐疑
　しかし、＜個人的防止＝自己責任＞の発想には、落とし穴がある。なぜなら、自己責任が全面にでると、公助、共助が後退しまうからだ。自助、共助、公助はバランスが大事であるから。
　コロナ禍にあって、自助は無論必要不可欠だが、孤立化を招く恐れがある。分断化された状況下で更に孤立化が進むとなれば、東京ナンバーの車が蹴飛ばされる事態を招きかねない。自宅療養者が亡くなること自体も避けられない。国は自粛を繰り返すだけ…。そもそも＜自粛＞や＜不要不急の外出＞とは何か？その判断基準は？という具合に疑問は深まるばかりだ。若者たちの＜路上飲酒＞が取りざたされている。大人たちは眉をしかめるが、いつの時代にあっても若者たちは自由を求める、それが特権であり、様々な意味で若いということだ。権力者（それに合わせるメディア）は、＜夜の街＞＜若者＞をターゲットとした。自己責任感のない＜ならず者＞扱いだ。県境を越える外出、旅行者に比するとごくわずかでしかないのにもかかわらず…。
〇共助こそが求められている
　＜自助・共助・公助＞と述べたが、コロナ禍の現状にあって、真に求められているのは、共助ではなかろうか。優先順位からいえば、＜共助＞＜公助＞＜自助＞ということだ。＜共助＞＜公助＞がないため、＜自助＞が、先頭に立っているだけ。私たちが向かうべき社会とは＜共助＞が先頭にたち、それを＜公助＞が後押しする社会ではなかろうか。

●おわりに

コロナのこと、世界、人類、社会のこと私たちが考えていかなければならない課題であり、そう思いたい。ただ、あえて、こう言いたい。国家が存在する限りにおいて、自国民の安心、安全、幸せを第１に求めるのは当然ではないか。

それが、ないがしろにされるなら、国民一人一人が自らとその家族を守ることが必要だ。ただ、そこに追いやってしまっている社会の在り様に今一度、立ち返って自問自答してみることも肝心だ。コロナ禍において、こんなに苦労しているのだから何かを見つけるのも必要な作業だ。物事の核心は、卑怯なことに隠れているから、見つける努力が必要だ。皆さんとともに見つけ出していきたい。＜見つけることを怠れば、見えることも見えなくなる＞から…。

【北　一樹】

編集後記

今回はコロナ問題を再度、取り上げることになった。コロナを特集するのは、3度目だ。
一度目から一年以上経っている。こんなに長く続くとは予想だにしなかった。

それから、はや一年半が経過し、二度目の夏の終わろうとしている。国民はよく我慢をしていると思う。ましてや＜いつになったら出口がみえてくるのか＞わからない状況の中で…。

法人としても、この一年半、＜発熱者＞が出るたびに不安にかられ、PCR検査陰性結果に胸をなでおろしてきた。私たちの仕事は、＜テレワーク＞では成り立たない。

最近になって首都圏の感染者増加が減少傾向にある。私たちの地元である群馬、栃木、茨木三県も一ケタ前後で推移している。ただし、気を引き締めなくてはならない状況だ。

コロナ感染症に地球上の人類が振り回されている。今回、コロナ禍を世界的視野から捉え、我が国を振り返ることを試みた。経験したことがない事態の中で、＜見えてくるもの＞もあるはず…。緊張感の裏側で＜教訓化すべき何か＞を皆様とともに見出していければと思う。

編集委員会

法人本部：群馬県太田市鶴生田町733-123
TEL：0276（20）2509　FAX :0276（20）2510
ホームページ：http://arcadia-gr.com/